

六甲山牧場のめん羊

久 米 正 彦

めん羊は日本では昭和38年944,940頭をピークに減少の傾向をたどり、昭和49年2月の調査では全国15,730頭となり、近畿地区は160頭、その内兵庫県120頭が計上されている。しかし、120頭を調べてみると六甲山牧場90頭（日本コリーデル種85頭、サフォーク種5頭）と残りの30頭もほとんど六甲山牧場に関連性をもつものである。

当牧場にめん羊が飼育された時期と用途は昭和31年11月に兵庫県粟粟郡山崎町のめん羊市場で8頭（雄2,雌6）と福島種畜場より7頭（雌）導入した15頭が基礎となって現在にいたっている。そして学術研究用、病院、衛生研究所、動物検疫所、公共団体の観光用、血清製造、動物園などに払下げなど我々の日常生活に役立っている。

簡単に飼育している2品種について

コリーデル種は毛肉兼用種でニュージーランド南島のオータゴ州の原産でメリノ種雌にリンカーン種雄、ボーダーレスター雄を交配して系統が作り出され1902年にコリーデルの名が決められた。被毛は白色、雌雄無角であり体重は雌55~80kg、雄80~110kgで枝肉歩留りは45~50%位で、筋肉繊維太く、肉質は普通で肥えい性は中等である。毛量は雌3~6kg、雄4~8kgで、毛長は9~15cm、番手は50~58'Sである。

サフォークは肉用種で英国イングランドの東南部のサフォークシャー州が原産である。地方種ノーフォークホーンにサウスダウンを用いて改良し1810年に品種として認められた。雌雄無角で頭部と4肢には羊毛はなく黒色の粗毛でおおわれて耳は長くてうすく、絹糸状の短毛を生じている。体重は雌50~80kg、雄80~130kgである。早熟早肥でかつ肉質が良く多い、羊毛は中等の長さで、毛量3~4kg、番手52~58'Sである。

日本コリーデル種の繁殖性について現在までの研究結果を中心に示すと、(1)分娩時期について（図1）東北大学川渡農場の分娩状態が日本におけるスタンダードなものと考えられる。コリーデル種の妊娠期間は約150日であることより、他の北半球のめん羊と同じく秋が交配期とされている。つまり1年の内分娩母羊の月別分布は2月~5月に一度の峰のみである。当牧場は11月~1月と4月~6月の2峰を形成しており、なお、やや年中分娩現象が認められる点が相異性である。(2)生時体重は当場では単子の場合3.43kg（雌）、3.86kg（雄）、双子2.80kg

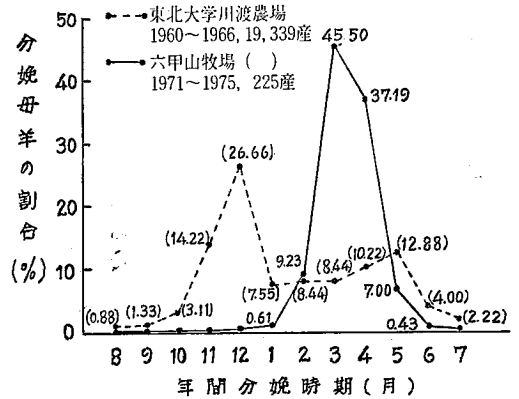


図1 日本コリーデル種の分娩時期と六甲山牧場の分娩時期との比較

(雌), 3.10kg (雄) で雌<雄, 単子>双子の関係がある。スタンダードなものより全体的に小さい。これは当場の成羊の体格が小さいことから来ていると見る。(3)性比に関しては雌が53~57%の報告が多いが当場では平均49.8%でほぼ雌雄が半々である。(4)年平均分娩回数は1.21回であり、双子分娩率は22.2%。(5)初産受胎か月で体月齢については雌雄の性成熟に関連があり、生後6~7重30kg程度に達した頃とされている（図2）で解る通り、当場の昭和31年~36年生と昭和45年~46年生の状況でも6か月齢、7か月齢の受胎率が表れている。(6)分娩後次期受胎までの月数と発生回数は昭和46年~48年において40頭中で2~5か月間に受胎した回数は25回、頭数にして15頭が発生している。つまり10か月間に2回分娩した頭数が15頭となる。図1で示した状態と2回分娩は当場のめん羊で最も特色ある現象と考えている。(7)雄と雌の同居数（混飼で自然交配）については一般的には雄1頭に対し雌30~50頭とされているが、当場は雌2.7~7.8頭で繁殖学的には非常に多い。この点が当場の繁殖異常現象に関与する一つの要因と考えられる。(8)飼料給与および牧草採食の栄養性（年中約午前8時30分~午後3時頃まで自由放牧）より見れば11月~4月までは牧草の草生などで低下しかつ、栄養のバランスがくずれる傾向があるが、5月~10月では栄養が十分に満たされると共にバランスもとれてくることが解った。この点(7)と同様に繁殖異常現象のポイントの一つと考える。

これらの繁殖異常は六甲山牧場の目的から喜ぶべきことであり、畜産学、獣医学上からも関心をもたれている

ことは六甲山牧場のめん羊がより一層価値あるものと考ええる。

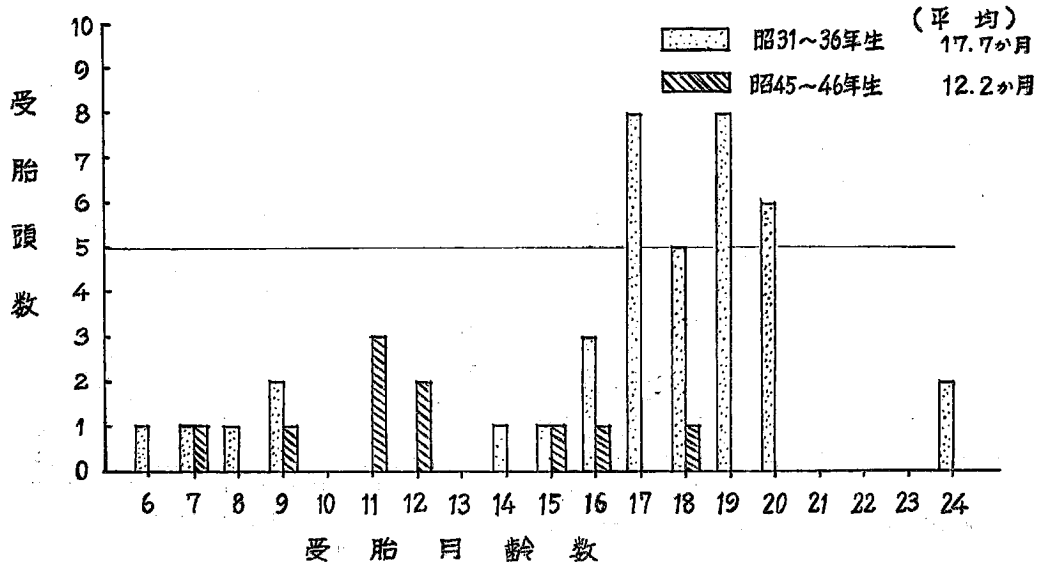


図2 六甲山牧場における初産受胎月齢状況